
本当に友達

会津遊一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本当に友達

【Nコード】

N1063I

【作者名】

会津遊一

【あらすじ】

私と彼は、友達だった。奇妙なぐらい馬が合い、何時も一緒にいた。ホモだとも疑われるぐらい親しかった。もっと一緒にいたかったから、同じ会社に就職までした。でも、ある時、仕事場で大きな事故が発生して……。

私は、愛想が良かった。

誰とでも友達になり、誰とでも遊んだ。

何処にでも呼ばれ、何にでも参加した。

でも、私が死んだ時。

泣いてくれる奴がいるかと聞かれれば、いないと答えるしかない。

八方美人だったので、誰の印象にも残らないらしいのだ。

ようは、空気君って奴。

私は、これも性分だと思って諦めていた。

テキトーな友達と付き合って、テキトーな恋人でも作り、テキトーな人生を送れば良いのだと。

そんな折。

コンパの二次会で彼を知った。

どうやら大学で同じ研究サークル、だったらしいのだ。

私は君の存在を知らなかったと笑った。

「僕は影が薄いから」

彼はビールを飲みながら、苦笑いしていた。

それが、私達の出会いだった。

彼とは妙に馬があった。

一緒にいて空気が馴染むというか、苦にならないというか。

表も裏もなく、付き合う事が出来た。

お互いの良い所も悪い所も、尊重した上で一緒にいられた。

同じ講義を受け、住む所もルームシェアをした。

でも、仲が良すぎたのか。

「あんた達、ホモでしょ」

知り合いの女性に、そう馬鹿にされた。

「うげえ、気持ち悪い事を言うなよ」

と、私達は揃って同じ事を答えていた。

就職先も、同じにした。

私は、これだけ仲良くなったのだから、もっと一緒にいたかったし。それは彼も同じだった。

私達は話し合って、2人で行ける会社を探す事にする。

片方が受かっても、片方が落ちた場合は合格を辞退した。

そして、遂に大手加工会社の入社が決まったのである。

これで。

今までは友達。

でも、これからは仲間として、同僚として、ライバルとして。

頑張らねばならない。

「ああ、何時までも、そういう関係でいようぜ」

彼は笑っていた。

ある日。

実験中に、事故が起きた。

近くの実験部屋で、爆破と火災が発生したらしい。

私達にも、地響きのような振動が感じられた。

直ぐに壁の赤いランプが点灯し、足下には白い煙が忍び寄ってきた。

スピーカーから、爆破により消火活動が停止した、と放送されていた。

それを聞いた私と彼の顔から、サツと血の気が引いた。

実験施設というのは、誘爆が起こらないよう、自動的に通路が遮断されてしまうのだ。

つまり逃げ道が残っていなかった。

消防車が間に合わなければ、死ぬしかない。

「まさか、こんな最後になってしまうとは……」

彼は泣いていた。

私は諦めるな、まだ何か生き残る方法があるだろう、と言った。

「しかし、避難する場所はない。ここに居れば、やがて煙を吸い込んで死ぬ」

その通りだ。

逃げるしかない。

だが、閉じこめられていて、その道がない。

そう考えた時、私はハツとした。

さっきのは大きな爆発だった。

もしかしたら、その近くの防火扉は作動していないかもしれない。

その向こう側には、隔離施設がある。

そこに逃げ込めば、あるいは助かるかもしれない。

だが彼は、私の言葉を馬鹿にする。

「扉は開いているかもしれない。けど、そこに辿り着くまでが火の海じゃないか。下手な希望を考えさせないでくれ」

私は、すまないと謝っておいた。

「……すまないだあ？ 友達だからってお前の残業に付き合ってたから、こんな目になったんだろっ！ お前の責任だよっ！」

彼は怒り、私に掴みかかってきたのだ。

赤い顔をして、首を締め付けてきた、

私は止めると言って、彼をドンっと押しつけた。

すると、そのまま彼はヨタヨタと倒れ込み、机に頭をぶつけてしま
う。

その後、ぴくりとも、動かなくなった。

ツーンと赤い血が、地面に広がっていく。

それを見て。

私は。

気が動転した、私は。

彼の水分に満ちた肉体を、研究で使う台座に乗せた。

震える手で写真を撮影し、PCにデータを投影させた。

そして涙を流し、マウスでスタートボタンをクリックした。

すると台座の上の箱が動き、白いレーザー光線が放たれた。

石や鉄を細工する光線なので、するすると彼の体を分けていく。

ああ、ここが加工会社で本当に良かった。

やがて、白桃の皮がむけるように、ずるりと彼の皮膚が落ちた。

悲しみに暮れた私は、その皮を着込んだ。

濡れたレインコートのように、肌に吸い付くので着にくかった。

最後に、切断した彼の腕を絞り、私は全身を血で湿らせておいた。

私は覚悟を決め、部屋から飛び出した。

通路は既に、大きな火で包まれていた。

少しビビッたが、私は火の海に飛び込んだ。

この火の壁の向こう側にきつとあると信じ、出口に向かって走り続けた。

じりじりと彼の皮が焼かれ、彼の血が乾燥していく。

縮んだ彼の皮膚で、中にいる私の体が締め付けられていく。

だが、私は無事だ。

私の肉体は焼けていない。

私はありがとう、と呟いた。

残業に付き合ってくれて、ありがとう。

本当に友達でいてくれて、ありがとう、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1063i/>

本当に友達

2010年12月21日15時00分発行